

『源氏物語』とは

- 『源氏物語』は、紫式部によって11世紀の初めに書かれたものである。奈良時代の『万葉集』や清少納言の『枕草子』とともに著名な古典文学で、日本の花の歴史を知る上でも重要な文献の一つである。
- 物語は、54帖からなり、1帖から10帖のうち9帖までが植物に関する題名がつけられるなど描写も植物を背景にしているものが多く、また物語は、春夏秋冬の季節に従って書かれている。
- 作者紫式部は、平安京東郊の地、現在の廬山寺(京都市上京区寺町広小路)の境内に居住していた。ここで育ち、天元4(1031)年59歳ほどで逝去とされる。紫式部は、藤原北家の出で、女房名は「藤式部」。「紫」の称は『源氏物語』の作中人物「紫の上」に、「式部」は父が式部大丞だったことに由来する。平成12年7月19日に発行された日本銀行銀行券二千円札の裏には小さな肖像画と、『源氏物語』の一部が使用されている。

登場する植物

- 「源氏物語」に登場する植物は、草本類が約50種、木竹類が約60種で合計約110種とされ、最も出現回数が多いのはマツで約60回、モミジや紅葉も約60回、次はサクラで約50回、ウメ、フジ、ヤマブキ、ナデシコ、キク、ハス、オミナエシ、タチバナと続く。
- 春は、ウメ、サクラ、フジ、ヤマブキ、ヤナギなど。夏は、タチバナ、サツキ、カエデ(若葉)、カシワ、アサガオ、ユウガオ、ナデシコ、ショウブ、ハスなど。
秋は、ハギ、カエデ、モミジ、キク、フジバカマ、オミナエシ、キキョウ、リンドウ、ワレモコウ、ススキなど。
冬は、コナラ、マツなど。多くの植物が庭を彩り、また鑑賞栽培だけでなく、植物は十二単や襲(かさね)などの色合いに取り入れられ、『源氏物語』に記述のある50色の約4分の3は植物に基づく。
- その花の特徴などから登場女性を例えており、「野分」(第28帖)では、「紫の上」は樺桜のように華やかに美しい姿と表され、「玉鬘」は八重ヤマブキの花盛りに霞がかかり、夕焼けの残照に映えるようだと表現され、また「夕顔」(第4帖)や「末摘花」(第6帖)などは巻名になっている。



57 ハス *Nelumbo nucifera*



51 ササユリ *Lilium japonicum*